新たな伝統をつくる

ろくろの上を回る粘土の塊は、みるみるうちに焼き物の形へと変わります。まるで魔法の手―。熊本県伝統的工芸品として3月に指定を受けた泗水窯。本市では昭和54年に指定された『出田みの保存会』以来39年ぶり2件目の選出です。緻密に計算した技法を駆使して陶芸作品をつくり出す福吉浩一さんに話を聞きました。

陶芸家
福吉浩一さん(竹の下)

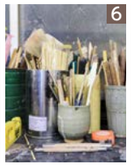
昭和29年4月2日、鹿児島市生まれ。九州産業大学芸術学部卒。熊本県美展工芸部門で最高賞(昭和57年)、くらしの工芸展グランプリ(昭和60年)、日本伝統工芸展に25回入選など受賞多数。平成13年には秋篠宮家へ作品を献上。日本工芸会正会員、元熊本大学非常勤講師。64歳。

1 8

7

3

2


6

5

4

1_窯を開いた当時から包装紙は変わらぬデザイン 2_アトリエには作品が並び、購入もできる 3_大人気の陶芸教室 4_妻・里加子さん手作りの看板。妹の直子さんも同地で別の窯を構える 5_左下写真『炭化練上皿』の技法「練り上げ」は個々の粘土をいくつも合わせ、金太郎飴のようにカットし模様を作る 6_手作りの仕事道具が並ぶ 7_意識を集中して形を整える 8_愛用の工具たち

市で個人初の県伝統的工芸品に

土と向き合い続ける日々

「地道に続けたことが評価されて光栄です」。選出を受け福吉さんは笑みを浮かべます。

素焼きしたものを炭と一緒に焼く技法『炭化焼成』。印象的な灰黒色は、煙によって色付けられたものです。窯入れ時に空気を遮断しないと割れやすく、時間や温度、炭の量が違うと色ムラが出ます。熟練の技を持つ福吉さんでも2割は失敗してしまいます。窯に火を入れてから完成まで約3日。「早く作品に会いたいけど、そこは我慢。もし透明な窯があったら、焼き物の色がどう変わるか見てみたいよね」と無邪気に笑います。

黒を引き立たせる鮮やかな線は焼く前に模様を刻み、そこに別の粘土を埋め込む技法『象嵌』。「土は種類により熱で収縮する比率が違います。線の部分は2種の土を配合し、土台の土と同じ収縮率になるよう研究を重ねました」

工作好きが高じて大学で陶芸の道へ。炭化焼成を始めたきっかけは卒業後の修行期に見た弥生時代の発掘現場でした。「土器のかけらの黒色が美しくて。この色を追い求めたい」と制作を始めました。

昭和55年、母の実家がある泗水町に両親と転居。翌年に窯を開き、作品を生み出しています。実績に固執せず向上心を忘れない福吉さん。「陶芸は終わりが無い。これからも成長し続けたいですね」

教室は生徒たちの生きがいに

泗水窯では陶芸教室を週2回開催しています。「食器を作って孫にあげるの」「先生が格好良いから通っちゃう」と、おしゃべりしながら手を動かす生徒たち。30年以上通い続ける生徒もいて、最高齢はなんと92歳です。「皆さんが純粋に喜ぶ姿を見ると、元気をもらえます」と福吉さんは話します。夏休みは泗水公民館で子どもを対象に教室を開講予定。「経験を菊池に還元したい。多くの人に陶芸の楽しさを知ってほしいですね」

炭化練上皿(直径30㌢)

炭化線象嵌花器(直径34㌢×高40㌢)

熊本県伝統的工芸品

❶主に日常生活で使うもの ❷製造の主要部分が手工業的 ❸伝統的技術・技法により製造 ❹主な原材料として伝統的に使用されてきたものを使っている ❺おおむね30年以上の歴史を有する

上記の要件を全て満たした工芸品について県が指定。

指定書

■泗水窯
泗水町吉富2664-5
☎0968(38)4545

【問い合わせ先】
市長公室広報交流係
☎0968(25)7252